連載　過去の災害を振り返る　第２回

昭和南海地震の体験談

1946 年 12 月 21 日午前 4 時 19 分紀伊半島沖を震源とした巨大地震

体験談その１　徳島県牟岐町南海道地震津波の記録「海が吠えた日」から

牟岐町東部の被害、津波の通った道筋
（徳島地方気象台ホームページ）

４時過ぎだったでしょうか。大きな揺れでした。私はひいじいさんから、昔の安政津波の話をよく聞いていました。『安政の津波で、海蔵寺へ逃げたが、荷物を取りに家へ帰った人はみんな流されて死んでしもうた。大きな地震の後には、必ず津波がくるよって早よう高い所へ逃げえよ。』

私が三男（６歳）を背負い、長男（12歳）の手を引き、妻は四男（３歳）を背負い、二男（10歳）の手を引いて、家と家との間の狭いあわえ（裏路地）をぬけて畑の道へと出ました。妙見さんを目標に真暗な細い道をみんな走り続けました。

しかし途中、道の下に暗渠の口があって、はや潮がふき出てきていました。あっという間に腰までつかってしまいました。みんなが必死で流されないようにつかまっていましたが、三男が私の背中から落ちて波にさらわれ、暗渠の中へ吸いこまれてしまいました。長男も流されて、私と一緒に泳ぎました。妻たち３人も大牟岐田の田んぼの方へと流されていきました。三男を殺してしまったとガッカリしていた私の目の前に、次の潮で三男が暗渠の口からぽっかりと浮き上ってきました。本当に運がよかったのですね。あわててつかまえ抱き上げ、長男と３人でようやく畑へはい上がり、妙見さんへと辿り着きました。

牟岐町、田園の被害
（徳島地方気象台ホームページ）

妻たち３人を捜してみましたがどこにも見えません。みんな流されて死んでしまったかと半分はあきらめていました。そこへ知人が、「３

人が助かって牧場で火にあたっている」と知らせてくれました。大急ぎでかけつけ、みんなの無事な姿を見て喜びあいました。家は跡かたもなく、地盤も残っていませんでした。

私たちは着のみ着のままで逃げたので、その日から食物・着物・寝る家もありません。毎日親戚の家で一晩ずつ泊めてもらいました。ようやく応急住宅が出来、小さいながらも家族一緒に毎日落着いて寝ることができほっとしました。忘れてならないことは、被害のなかった町内各地区の皆さんに大変お世話になったことです。

体験談その２　徳島県牟岐町南海道地震津波の記録「海が吠えた日」から

早朝まだ暗闇の中、突然今までに経験したことのない激しい大地震に眠りを破られ飛び起きました。この時階下から「揺れが止むまで怪我せんように蒲団を被っとれよ」と祖母の声が聞えたので、また蒲団にもぐり込みました。

初めは横に揺れていたが、直ぐに上下振動に変わり、家は大きく軋り、神棚や箪笥の上にあったものがバラバラと落ち、天井から下った電灯が振れて音をたてていました。地震が止むと、服を着て階下に降りましたが、雨戸が閉っており、外の様子は分かりませんが、騒がしい物音は聞えず静かなようでした。

まもなく母や祖母が妹や弟たちに服を着せ終わり、皆玄関口の部屋に集まりました。外から雨戸を叩いて「津波が来るぞ、はよう逃げえよー。」と伯母の声が聞こえて、足早に走り去って行きました。津波が間近に迫っているのも知らず、「子供らは先に逃げとれ。」と母に言われ、私が先頭に立って入口に行き、障子を開けた途端にドーン、ザーという音と共に、雨戸と雨戸の隙間から一斉に海水が吹き出してきました。「みなはよう２階に上がれ!」と言う祖母の声に、母は一気に階段をかけ上り、続いてみんなが２階にかけ上りました。

いつの間に用意したのか母がローソクに火を点しており、その明りがみんなの顔を照らしていました。母が「階段の上近くまで波が来とる」と言い、祖母が「もうあかんやわからん、死ぬんやったらみんな一緒や、手をつないで離すなよ」と言い、７人が輪になって手を握り合いました。

牟岐町、道路に押し上げられた漁船
（徳島地方気象台ホームページ）

ローソクの明りもいつの間にか消え、真暗闇の中でヒタヒタと波の走る音だけが聞え、ドーン、ドドーンと家に何か打ち当たる音が数回続いて聞えたと思った瞬間、突然家が崩れるように倒れ、家に押し潰されるようにしてみんなが水中に押し込まれました。

私は水中で天井に頭を押えつけられ、いつの間にかつないでいた手を離し、必死になって天井板を突き破

ろうと海水を呑みながらもがいていたところ、急に頭の上が軽くなって、壊われた家の柱にまたがった格好で水面上に胸まで浮き上りましたが、近くにいたはずの家族の姿が一人も見えず無我夢中で水の中をさぐり、手にさわったものを引張り上げました。幸いにも弟や妹たち３人は間近におり、祖母は少し離れて浮き上っていましたが、母と叔母の姿は見当たりませんでした。

真暗闇の中で浮いている不安定な壊れた家の木材にまたがって、胸近くまで海水につかった状態であり、祖母に「動くと危いからそのままでおれ」と言われ、みんなでこのまま夜明けを待つことにしましたが、海水につかっているので寒いとは感じませんでした。

この間にも津波は満ち引きを繰り返していたようで、梁や柱が動き軋る音がしていました。

次第に空がしらみ始め、足元が見えるようになり、「気をつけて道へ上がれ」と言う祖母の声に、みんなは梁や柱を伝って右岸の道に上がりましたが、この時には津波はほとんどひいていました。

田圃には漁船が何隻もすわっており、蒲団や衣類、家財等が散在し、遺体もあちこちで見られました。昼前に母が、午後になって叔母が遺体となって見つかり、充分な弔いもできないまま翌日埋葬されました。

津波に対する知識も現在に比べると乏しく、大地震の後に津波が来るとは聞いていても、まさかこのように早く襲ってくるとは、祖母や母も思ってもいなかったのではないかと思います。

悪夢のような南海地震津波のことは、思い出すと気持ちが滅入り、あの時に欲をすててすぐに逃げていればと今だに悔まれます。

体験談その３　昭和 24 年高知県発行「南海大震災誌」中　遭難体験談

私たち一家５人が高知に着任したのは９月20日の未明であった。街は戦後１年経ってはいてもまだまるで焼け野原だった。やっと探し当てた住居は焼け残りの文化ビルの３階であった。私が陣どった３階はホールであったらしく柱が真ん中には一本もなく壁に沿って立ち並んでいた。それを連ねて板が張り廻らされ柱のところで小部屋を仕切ってある始末。電気もなければ水道もない。そんな状態で３か月を過ごし、いよいよ明日は引っ越しという日に地震に見舞われたのだ。

ビルの倒壊、高知市堺町付近
（高知県庁ホームページ）

何時頃だったのか、突然目ざめた私は、暗闇の中で小用に行った。正に放尿しようとした時巨大なコンク

リート建物が、ぐらぐらと揺れ出した。地底から湧き出てくるような。凄まじい唸りを聞いたようにも思うが、それはビルがきしむ音だったかもしれない。また窓の外に一点ピカリと光輝いた星を認めたようにも思うがそれはコンクリートが擦れ合って発した火花の幻影だったかもしれない。ビルが倒壊する？　恐怖に捕えられた私は自分の仕切り部屋に飛び込むと妻の名を連呼した。妻も恐怖に満ちた声で私を連呼しているだけだった。一瞬の止み間もなしにビルは揺れつづけ立っておることはできない。私はその時已にビルの倒壊を確信した。私はこの期に及んで始めて絶体絶命の窮地に追いこまれていることを覚った。

家屋の倒壊、四万十市中村大橋通二丁目付近
（高知県庁ホームページ）

死は免れないなら、せめて親子揃ってと私は部屋に引返した。次の刹那さしもの激動も一瞬止んだ。「もう大丈夫大丈夫」私は妻を励まし次女を抱いて布団を被ろうとした途端、再び激烈な振動が襲ってきた。前よりもっと強烈なものだった。私は急いで長女をも抱きこもうと、その布団の方へ手を延ばしたがその時には、もう目も口も開いていられなかった。コンクリートの破片が顔一面にぶつかり視界はもうもうたる粉塵で真暗になった。それでも私の右手はかすかに長女の布団にふれた。と思ったその瞬間、私の体はコンクリートの床もろとも奈落の底にひかれて行くように墜落していた。仰向けに投げ出された私の頭上遥かに廃墟の如くビルの残骸がそそり立っていた。窓は黒暗々としていた。私はそのまま意識を失ってしまった。その次に私が憶えている光景はコンクリートの破片の丘の上で、長男を腹の上に乗せた妻と私は並んで頻りに救けを求めていた。やがて中村行の一番バスの警笛が聞え提灯や懐中電灯の光が遥か下に見え出した。救援の人々がコンクリートの山を上がってくるのが大変もどかしかった。私が意識を失ってから救出される迄の間の事柄を後で妻は次のように話してくれた。私は次女の泣き声で意識をとり戻した。そして脊椎を骨折していながらまるで常人の如く起き上ると涙にぬれそぼれながら次女を救いに行って抱き上げようとして始めて左腕を失っているのに気がついた。次女を片手で抱えて妻のところに戻ると止血させようとしたが、腰が抜け手に力が入らないので、私は腰紐の一端を口にくわえて止血した。そのため多量の出血にも拘らず、私の命はとり止めることができた。しかし、長女は墜死してしまって死体が掘り出されたのは２日後であった。

体験談その４　須崎市広報平成 27 年 12 月号掲載「振り返る昭和 21 年 12 月 21 日」

その当時は、原町のお地蔵さんの通り沿いに住んじょった。１階にお父さん、お母さん、上の男の子、中の女の子、２階に私と夫、下の男の子が寝よりました。

地震がゆって、いやっと目が覚めて飛び起きた。えらい横揺れで、怖くてたてれん。大きな地震じゃと座り込んでいたら、「潮が入りゆ、はよう逃げ」と言う声が外から聞こえてきた。私らも逃げようと思ったら、北側から潮が逆落としの様に流れて来て、１階は水でいっぱいになったがやき。逃げれんき、私は、夫と下の男の子とお父さんと２階に上がったわけよね。そのときにはお母さんは、上の男の子と中の女の子を連れて逃げちょったもんよ。１階にはおらんかった。２階から近所を見ると１階の天井に届くような水が来ちょった。駅前の方の人がこっちへ逃げて来てね、水が来ゆき、何人か２階に逃げ込んで来た。私は、お母さんと子どもたちがおらんき、気になってしかたない。家からお母さんと子どもたちを呼んだ。そしたら、「正通（上の男の子）はおるぞー」と山から返事があった。けんど、お母さんのことは言わんが……

外に出られたのは、明るくなってからやった。上の男の子は、城山におって、たき火で温めてもらいよった。問うたら、「僕は木につかまって、おじさんが山に上げてくれた。おばあちゃんらは分からん」としか、泣いてよう言わんがよ。どうも、上の男の子は潮に上げられて、城山の際にある家の門口の木に登って助かったらしい。でも、お母さんと中の女の子は流されちょった。お母さんは女の子を背負っているし、足をさらわれてしまったようで……

線路を津波による漂流物がふさぐ須崎市浜町付近
（提供 須崎市）（高知県庁ホームページ）

親戚が手伝ってくれて後片づけをしたけど、私は親と子どもを亡くしたしね、体が溶けたようになってね、ちっとも手に付かんが、疲れ果てちょった。女の子の夢をびっしり見よった。あそこにおる。一生懸命行ったら、また次のはえ（岩）におるがやき。あこにおる。急いで急いで行って……そういう夢をしょっちゅう見よった。いざというときのためにも、家族でちゃんと話し合いをして、家におって地震が起きたら行動を共にするとか、決めておくといいと思うね。

体験談その５　災害文化の伝承（東南海・南海地震体験談）（和歌山県ホームページ）

当時18歳、自宅で就寝していたが目が覚め、自宅前の小川岸に立っていた時に揺れ始めた。「何？」と驚き、下を見ると川の石垣で造られた壁が前後に動き、上を見ると家が被さってくるようだった。後を向いて逃げようとしたが、足が思うように動かず、這って後方の石垣まで行った。大きく横に揺れていたので、石垣に掴まらなければ立てなかった。そのまま揺れが収まるのを待った。

早朝でまだ暗い時間だったので、もう一度布団に入り寝ることにしたが、「坂の上の方で津波が来るて言うちゃあるで」と母が父に言っているのを聞き、すぐに着替えて、

父と100m程坂を下りた浜にある仕事場に走った。その時、足元に水が溜まっており、仕事用のゴム草履では歩き難い程だった。浜のガンギ（船を昇らせる場所）まで行くと、凄い勢いで潮が引いている状態だった。ちょうど第１波が来て、引くところだった。地震から30分も経っていなかっただろう。

潮が引いていき、やがて、湾が空っぽになってしまった。堤防からは、引いた潮が滝のように流れ落ちていた。海水が無くなり剥き出しになった海底が見えた。よく見ると、深い位置に避難が遅れたと思われる船が据わってしまっていた。

第２波が来た。どんどん潮が増えてきた。さほど恐くはなかったが、沖の方で潮が白波を立てて押し寄せてきた時はドキッとした。堤防より何倍も高い潮が下から盛り上がってくる。避難しようと自宅へ50mの場所に来た時、川のそばだった。後から追いかけてくる潮と、川から盛り上がった潮、小路を伝ってきた潮の３方に追いつかれ、すねの半分まで浸かるともう走れなかった。急遽、山道を上がって、上から様子をみることができた。

潮が帯になって湾の中を回ってきて、湾の中が一杯になった。一瞬荒れていた海岸線が池のように凪いでしまい、何もかも水に埋まってしまった。そして、「ドォーン」と腹に響く音がしたと思ったら、潮が引き出した。物が流れてきたので引き出したと判った。日方川が一番多く流れて来た。家具、倉庫、タンス、樽、ドラム缶……。屋根や船に乗って「助けてくれー！」と助けを求めながら流れていく人も目撃した。どうすることもできないまま、地獄絵図を見ているようだった。

引いてしまった後に山から下り、様子を見に行ったところ、隣近所の家がひっくり返ってしまって、内の１軒は潰れてしまっていた。津波は４回来たのを目撃した。第２波が一番大きく、３波、４波は等間隔で来た。昼までには収まったが、海ではまだ潮が右回りにくるくると回っていた。

自宅に被害が無かった為か、元通りの生活に戻れた。水や食料に関しては変化なく、地震以前と比べて不自由は無かったと思う。海抜８ｍの高台の土地に引っ越した。家族とは、避難場所や非常時について話をしている。非常用の物資は、いつでも使用できるようにまとめて常備し、年１回、防災の日に電池の交換や消費期限の点検、作動確認等をしている。米は予備を置くようにしている。

海南町浅川、海岸から約 300 mの耕地内に打ち上げられた貨物船（徳島地方気象台ホームページ）

体験談・手記を活用した効果の大きい図上訓練手法を「地域防災（創刊号）」で紹介しています。あわせてご参照ください。